

2030年への挑戦

次世代産業技術

「大学構内」や「自由が丘」といった特定の場所にいる個人に焦点を絞る。NTTレゾナントと共同で学生を対象に実施した実証実験の装置だ。

こんな街案内の実験が徐々に始まっている。センサーで集めた情報をネットワーク化し、個人のニーズに合わせたきめ細かい情報の提供を目指す。街の活性化にも効果的として注目されている。

一月下旬の夕方。神奈川県藤沢市の慶応義塾大学湘南藤沢キャンパス内。バス停前に男子学生が歩いてきた。すると、バス停前にはディスプレイが表示された。最寄りの駅前にある食堂で、大盛りメニューで有名なところだ。

センサーネットワーク



慶大構内のバス停前のディスプレイは、前に立った人に合ったお店を紹介する（神奈川県藤沢市）

場所に応じ情報提供

《实用化の将来像》
総務省が昨年6月に発表した研究開発ロードマップによると、センサーや通信装置、端末などを統合したサービスは、2015年4兆2000億円の内、2020年ごろには個人認証や課金システムなど様々な方式が確立し、国際相互運用が可能になるといわれている。

私の目覚め

センサーネットワークに詳しいNTTコミュニケーションシヨンの科学基礎研究所の岡留剛主幹研究員が、まずセンサーや通信装置の小型省エネ化と、振動や蛍光灯などを活用して発電する電源が必須になる。また普及にはセンサーのデータを人

トワークの実用化を後押しするのが、無線通信インフラの整備。慶大では、今後、次世代高速無線通信「WiMAX（ワイマックス）」を活用し、キー位置を検知するセンサー無線の電波との位置関係から携帯電話の正確な年代や性別に応じて人気が高い。「レ」で、店舗に入ったり出た店舗内の情報把握が不可欠なのだ。

一月下旬から二月八日にかけて、東京急行電鉄と共同で実施した実験の一環として実施し、性能を無線LANの基地局や端末がもっと増えて精度よく使いやすくなる（N E Cの中尾敏康・主任研究員）という。

既存の無線LANの電波を活用した同様の位置検知技術は、東京大学のシネスモデルを描くことも必要だ。（長倉克枝）

「このディスプレイは、慶大の三次仁准教授らがNTTレゾナントと共同で学生を対象に実施した実証実験の装置だ。」

「センサーや通信技術と位置情報サービスのクワジット（東京・港）が二〇〇七年に商用化した。多くはいる場所に応じて内容が変わる地図ゲームへの活用という。」

「（光ファイバーなどの）有線の通信網が無線に置き換わる動きがある。そうすれば無線LANの基地局や端末がもっと増えて精度よく使いやすくなる（N E Cの中尾敏康・主任研究員）という。」

「（光ファイバーなどの）有線の通信網が無線に置き換わる動きがある。そうすれば無線LANの基地局や端末がもっと増えて精度よく使いやすくなる（N E Cの中尾敏康・主任研究員）という。」